

## 錦絵と忠臣蔵



\* 鳥居家文書92「錦絵忠臣蔵」  
討ち入りの場面を描いています。

### 解説

江戸時代中期に浮世絵の技術が進み、版木を何枚も使った「錦絵」とよばれる多色刷り版画が大流行しました。写真は歌舞伎や人形浄瑠璃で人気のあった近松門左衛門の「仮名手本忠臣蔵」に画題をとったもので、左下の「国長画」の国長は浮世絵師の歌川国長（1790～1829）と思われます。歌川国長は、役者絵や美人画で絶大な人気を博した初代歌川豊国の門人でした。

「仮名手本忠臣蔵」は1701（元禄14）年から翌年末にかけての、いわゆる元禄赤穂事件を題材としています。江戸時代には、時代物や同時代の武家社会の事件を上演する場合には、幕府を憚って、舞台となる時代や登場人物を他に仮託していました。「仮名手本忠臣蔵」でも、赤穂浪士たちに討たれる吉良上野介は「高師直」、討った大石内蔵助は「大星由良助」として描かれていますが、当時の人々は、当然それが誰にあたるかは理解して味わっていました。

\* 「仮名手本忠臣蔵」は、当館所蔵の内田家文書（防府市）、小田家文書（柳井市金屋）、国司家文書、内藤家文書（下松市）、原田家文書、持山家文書などにあり、防長でも広く読まれていたことがわかります。